

【パネルディスカッションでの討議内容（要旨）】

- 安城市の街、中心市街地の印象について、第一印象としてどのような感じを受けられましたか？（以下、発言順）
 - 常世田氏：私が前に仕事していた千葉県の浦安市は人口16万人で、市の財政力指数も安城市と似ている。市民構成も引越してきた新住民と元々地元の住民が居る、ベッドタウンであるところも似ている。全国的に、駅前の商店街の状態が良くないが、外から来た人間からすると昔からある商店街にこそ、街の文化や魅力的な商品も有ったりする。
 - 三矢氏：「岡崎市図書館交流プラザりぶら」の計画段階から市民参加のプログラムをコーディネーターとして関わったが、当時の雰囲気似ている。議論は何のための図書館造りか？から始まった。街中に図書館造って儲かるのか、経済活性化と図書館は関係ないという意見が多かった。中心市街地はどういう市街地であるべきなのかという議論も一方である。既に充足している消費の中心地を創るより、社会で今後必要なものは何か。学びの拠点、交流の拠点の必要性から、市民の文化が育まれるような拠点が作りたいたいと気づいた。また、中心市街地で空き店舗が多くても、市街地というのは入れ替ってしかるべき。社会の変化に適合できず、市民の欲するものが無ければ、入れ替わることが市街地のあるべき姿。だから図書館を造ることは、新しい文化をつくるということを一つのベースにしなが、社会の変化に相応しい何かをつくり出していくことを、共通認識にしていかないと中心市街地拠点施設づくりは始まらない。
 - 小島氏：昨年、まちづくり会社が生まれ劇的変化ではないが、いろんな動きが起きている。「いちじくソース」、「新美南吉クッキー」等を発売したり、新美南吉をテーマにしたギャラリー及びカフェとして「南吉館」を完成させ、壁画が生まれ、ビジュアルで街中を変えていこうという動きが生まれている。交流広場でどんな取組みが行われているか紹介する。毎月「街なか産直市」を開催している。昨年、新美南吉の画ができた時には朗読会を行った。「安城まちな学校」とタイアップして産直市の時、子ども達への運動のイベントを行った。「七夕まつり」では、願いごとの聖地として、メイン会場として活用されている。その他にも「サンクスフェスティバル」等のイベントも開催している。イ

ベント以外にも、安城学園のダンス部が踊りの練習をしたり、スケボーだったり、各々が思い思いにうまく活用している。七夕まつりやサンクスフェスティバルは、たくさん人が来るが一過性で終わりがちなところがあった。そこで、平常時でも賑わいが演出できるように、産直市等を推進している。

- 神谷市長：界限の風景の変化の概略だが、更生病院は一日当り3000人程、単純に年換算すると大体100万人くらいに人の往来があったが、平成14年に郊外へ移転した。中心市街地の人出が極端に減少し、空き店舗が増えて後には風俗店が進出してきた。そこで、規制ができないか調べたが、巧みに法の網を潜ってしまうようで、空き店舗をつくらない対策を講じるため、チャレンジショップとして、新たに起業の支援をしてきた。撤退も幾つかあり、残念ながら街の活性化が図れたという状況にはない。これまでの経過から分かったことは、空き店舗の対症療法的な政策の継続でなく、根本的な活力の核となるものを造らなければいけない。社会の激変等もあり、思うように事が進まなかったが、ようやく基本的な拠点施設の素案をご覧いただけたので、新たな中心市街地活力再生に向けて頑張っていく。

■ 拠点施設は、情報拠点と呼ばれるような施設と、たとえば食品スーパーやレストランなどが考えられる民間の商業的な機能が一体となった、複合的な施設が検討されている。こういった拠点施設についての印象やお考えをお伺いしたい。

- 常世田氏：以前、浦安図書館の利用者にアンケートをしたことがある。地元商店主、企業主たちに図書館が提供しているサービスが仕事で役立ったことがあるか質問をした。58.3%がよくあると答えてくれた。そこでビジネス支援という名前をつくり、サービスを始めた転機になった。具体的に売上げが上がると分かれば、その税金分の予算を要求でき、地域の最大の課題である経済の活性化に図書館は役に立っていると言える。最近の例で言うと、長野県の塩尻市で複合施設として中心市街地活性化に一万数千㎡の土地に施設を建てた。その中に図書館とビジネス関係、子育て、シニア、まちづくり、等様々なセクションと、関係する市民団体が集える施設にした。人口6万人の自治体で開館1年で、長野県内で最も来館者が多い図書館になっている。市外の人も惹きつけて、集客力もある。浦安市の図書館年間の来館者数が延べて100万人ある。

後は、いかにその人達にお金を使ってもらうか、算段するだけとなる。

- 三矢氏：2つのチャンスが到来するのではないかと。1つはビジネスチャンス。もう1つはシビックチャンスみたいなものがあると思う。ビジネスチャンスでは、岡崎の図書館は新館になる4年前の来館者数が大体40万人で、現在は面積が増え、市民活動センター、国際交流センターもあり、160万人くらい。周辺では、弁当屋が新しく起業し旨く行っていたり、周辺の飲食店、生鮮食料品関係の売上げが上がっている。ビジネスチャンスを巻き起こすことは、ほぼ間違いない。その風をつかむ力があるかどうか、受入れ側の力量が問われる、努力次第。2番目のシビックチャンス、岡崎の場合は市民の間に議論を起こし、市民の有志の会が立ち上がって、3年経過している。市民レベルを結集、結実させるうえで図書館を市民の力で成功させることが一番重要だと思うし、そこが市民レベルが上がるきっかけに成り得るのではないかと印象を持った。

- 小島氏：まちなか産直市では、様々な方が出店している。お客は、多くも少なくもない。ショッピングセンターや他のイベントに出店した方が儲かるといった声もあるが、それでも出店をしてくれる人がいる。出店理由を聞いたところ、街中が面白くないと住んでいて面白くないと言われる、少しでも役に立ちたいから出店しているといわれる人もいる。風景として、にぎわいを出せる拠点施設であってほしい。要望としては、安城幸田線側に広場があり、毎週のようにマーケットやイベントが展開され、そのイベントで収益も得ることができたり、ステージがあり魅力的な広場を造って欲しい。また、地域住民のニーズでいうと、災害発生時の避難場所として、拠点施設が担ってほしい。そう考えると水路や階段を造り過ぎても都合が悪いと思う。

- 神谷市長：セールスポイントは2つ。1つは官民共同のモデルとなる施設であり、2つ目はハイブリット型の公共施設というところ。官民共同の施設は、安城市内にこれまで無かった。民間と行政が共同しあって、双方に効果が出て、かつ民間企業には当プロジェクトに参加することで大きなメリットが生み出される。そんな施設になってほしいと思う。まちづくり会社にも参加してもらい、メリットを享受し事業からある一定の利益を得て、その利益を街の活性化のために還元していってもらおう。官民のよき共存関係を生み出せると良い。ハ

イブリット型の公共施設では、図書館もハイブリット型。紙書籍と電子書籍と併せたハイブリットな図書館で、多目的ホールを兼ね備えることにより、若者やビジネスマン、今まであまり図書館に来なかった人たちが来る。一方で多目的ホールでは芸術、文化、軽スポーツなどに利用でき、幅広い年齢の方々が集る空間が生まれると思う。地域住民の方々からすると、魚屋、八百屋等が減った、無くなったと様々な声が聞かれる。この新しい施設には、民間の小売店舗も併設をしたいと思っている。

■ 拠点施設と街のつながりが非常に重要になってくるが、どこの地域でも非常に難しい課題になっています。街と中心市街地拠点施設のつながりについてご意見を伺いたい。

○ 常世田氏：一人一人の課題に合った形で、ビジネス支援とか医療情報などの情報提供をされるところが、従来の拠点施設と最も違う。情報提供は様々な専門機関、専門知識を持つ地元の方との連携が必要になる。図書館は地域の専門機関との連携を進め、地域の新しいチャンネルをつくることになると思う。

○ 三矢氏：交流・情報が広がっていくためには、拠点が一つあれば良いわけではない。民間、行政の仕掛けにより良いものができる。市民の知恵と力で豊かさを生み出す、そこに参画する、核は一つだけでなく、別の核をどんどん作っていくことが大事。岡崎の場合は、年に一回市民の手作りのイベントが行われている。市民の思いから仲間が集り、1万人くらい動員する巨大イベントになった。市民がプロジェクトの成否を決める。

○ 小島氏：にぎわい創出と商業活性化は、似ているが少し性質が異なると思う。その両者が合致してこそ、最高の力になる。この拠点施設ができれば、にぎわいは出ると思うが、店の客入り、回遊は別。店の魅力、まちのにぎわいが無ければ、歩きたくならないと思う。この拠点施設ができる前に街なかに行きたくなるような、イベントや街なかのブランド作りに取り組みたい。

○ 神谷市長：来年、新美南吉生誕100年にあたるため、南吉そしてまた南吉童話の世界というテーマでまちづくりを進めている。それとは別に既にJR安城

駅からデンパークに向けての道路には、アンデルセン童話のモニュメントが点在し、アンデルセン童話の世界が展開している。拠点施設と相乗効果が生み出せたらと考えている。周囲では区画整理により新しい街並みができるので、可能であれば、新美南吉がこの街で青春時代を過ごした時代を彷彿させるような、レトロ調の景観の街にできないか。景観を統一するために、建築コストの上昇分を安城市が補助することも可能ではないかと考えている。多くの方々とワクワクする楽しい街づくりを目指していきたいと思っている。